

SMC金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain SMC 豊島 健治

優良資産と不良資産の間 （「その他有価証券」の間）

今週11日の新聞に「滝野川信金 最終赤字400億円」という見出しで同信金が前3月期決算で有価証券減損処理に追い込まれ多額の赤字を計上したことが伝えられました。同信金は既に赤字を原因に上部団体である信金中金の金融支援を受けたことが報じられていましたので、この報道自体驚くことはありませんでしたが、赤字額が200億から400億に倍増していたことに改めて感じ入るものがありました。

新聞記事によると、サブプライム問題を機に価格が暴落し減損処理を余儀なくされた有価証券は「その他有価証券」に分類され、同信金の場合、「その他有価証券」の残高は昨年9月末時点で3,500億円まで膨らんでいたそうです。「その他有価証券」に3,500億円！ 私は、この一介の中規模信金が「その他」という名の付いた勘定科目に巨額のお金を投じなければならなかった所に地域金融機関全般が抱える根深い問題があるように思いました。そして、これは滝野川信金だけではない筈だ、そう思いました。

当然ですが、滝野川信金と同じ理由で巨額赤字計上を余儀なくされた関西の地銀・池田銀行を思い起こしました。結局、池田銀行は同規模の地銀・泉州銀行との経営統合に追い込まれましたが、この池田銀行も「その他有価証券」に巨額の資金を注ぎ込んでいたのです。貸出という名の不良資産処理から漸く身軽になったと思ったら、今度は有価証券という名の不良資産を抱え込んで瀕死の重傷を負ったというところでしょうか。この二つの金融機関はサブプライム禍に遭遇した気の毒な金融機関なのでしょう。

滝野川信金と池田銀行のネット開示資料から昨年3月末の「その他有価証券」等の残高を調べてみたら下表の通りでした。（単位：億円）

	池田銀行	滝野川信金
有価証券残高	9,345	2,902
内「その他」	4,183	1,961
「その他」比率	44.7%	67.5%
貸出残高	15,167	3,311

註：「その他」以外の有価証券＝株式、債券（国債、地方債、社債）を指します）

滝野川信金の新聞報道数値3,500億円とデイスロージャー数値とはかなりの相違があって新聞報道は誤りではないかと思いましたが、それにしても「その他有価証券」の残高が多い。有価証券全体の67%に達し、貸出総額の50%を超える金額が「その他」に投じられているのです。池田銀行は滝野川信金ほどではありませんが、やはり「その他」が占める割合はかなり高くなっています。「その他」とは一体どんな証券なのでしょう。

結論を云えば、債券（国債、地方債、社債）及び株式以外に区分される有価証券は、投資信託であっても証券化商品であっても、又REIT等のファンド類であっても何でも「その他」に入ってしまう。しかし、「その他」の中味は外からは見えない。開示書類をみても「その他」には何が入っているかわからない。そんな不透明な「その他」に金融機関が敢えて巨額資金を投ずるのは偏に「利回り向上」を求めるからです。

そして、ここに地域金融機関の苦境が垣間見えるのです。

滝野川信金は、新聞によれば「企業などへの貸出ではなく、有価証券運用で稼ぐ経営戦略が特徴」等と評されていますが、本当は「貸出で稼ぐのが難しい」から手間暇のかからない証券運用に行かざるを得なかったのではないのでしょうか。それは池田銀行にしても、その他の地域金融機関にしてもあまり変わりはない。実際、日銀公表のデータを見ても地域金融機関の中小企業向け融資比率は少しずつ低下を続けています。

融資したくとも儲かる（健全な）中小企業融資は増えない。だから仕方なく、儲かる（その他）有価証券投資に行く、それが実態ではないのでしょうか。そして気がつけば「その他有価証券という名の不良資産を抱えていた」。

金融機関が保有する「その他有価証券」に潜む問題点は未だ書き足りませんが、なんとなくご理解いただけたでしょうか。私が運用を担当していた頃も、証券会社等からその類いの勧誘は引きも切りませんでした。

翻って、貴社のBSには金融機関の「その他」に該当するようなものが潜んでいないでしょうか。優良資産だと思い込んでいたものが不良資産に転化することは珍しくありません。時に、そんな視点で自社のBSを診ることも必要です。